特集1

生き続ける建築 —10

松田軍平

Gumpei Matsuda

松田軍平が独立し、建築家デビューしたのは邸宅建築である。
コーネル大学で建築を学び、ニューヨークの設計事務所で実務を身につけた後、
最初のクライアント・三井家、石橋家の住宅を設計するために松田建築事務所を開設した。
この2つの邸宅は、後の事務所展開の礎となった。
その後、平田重雄をパートナーに迎え、生涯、共に歩み、
ツーマンコントロールで民間大規模建築事務所を育て、代表者として真摯に生きた。
建築家たるものは自己を律し、人格や行動までもが社会的信頼を得なければならないと、
建築家の倫理には頑だった。
また、欧米における建築家の尊厳を日本にも形成すべく、
広く建築界に働きかけ、建築家の職能確立の先駆けとなった。
懸命に生きた事務所創設期のアーキテクト・松田軍平にスポットを当てた。

アメリカ帰りの古武士

丸山雅子
MOTOKO MARUYAMA

まるやま・もとこ——建築史家／1991年、東京大学工学部建築学科卒業。1998年、同大学大学院博士課程単位取得退学。博士（工学）。
主な研究：スパニッシュ様式に関する歴史的研究、お雇い外国人ウォートルス兄弟の研究など。

■■■

父の教え

古武士——これは多くの人が語る松田軍平像である。洋行帰りには見えなかったとか、むしろ保守的な学者に見えたとか、羽織姿に絵筆を持たせれば日本画の大家の風貌だったと言う人もいる。パートナーの平田重雄［＊1］が繊細でダンディで、いかにも芸術家然としていたので、その対比が軍平の古武士ぶりを一層際立たせたのだろう。だが、アメリカの話を抜きに松田軍平は語れないし、平田重雄との縁も、その後の事務所の発展もなかったかもしれない。そして、古武士のような建築家のルーツは彼の父親にあった。

父・武一郎は東大出身の鉱山技師で、教育について明快な考えを持っていた。昌平［＊2］・軍平兄弟に、勉強のためなら財産を使い果たしても構わないと言い遺したが、決して学問最優先ではなかった。「一般の人間は学問をするために生れて来たものではない」がモットーで、年数のかかる大学ではなく、専門学校を出て、早く実地で経験を積むことを勧めた。「専門学校出でも努力次第で立派になれる」とドイツの例を挙げたという。おそらく、当時欧米各地に次々と新設された鉱山学校や、ドイツのフライベルク鉱山学校［＊3］のことが念頭にあったのだろう。武一郎自身、卒業後直ちに三菱に就職し、英国人技師の下で実地経験を積んでいる。さらに武一郎は、旅をすること、特に海外で知見を広めること、「余裕が出来たら上級の学校で勉強」することを勧めた。建築家の道を勧めたのも武一郎だった。海外を視察した際、「日本は欧米に比べて建築が一番遅れている」と実感したからだ。より具体的に、「学校を出たらコンドルさんか曾禰博士［＊4］でもいいから、俺が話をしてやるからそこへ行って、二、三年仕事をやり、それから外国へ行って、向こうのものを早く身につけたらいい」とまで話していたという。余談だが、武一郎の大学の先輩の渡辺渡［＊5］も、息子・渡辺仁の進路に少なからぬ影響を与えたようである。

武一郎は晩年、南満洲鉄道撫順炭鉱の初代所長として、集中暖房式の住宅群、上下水道、病院、学校、公会堂、社寺、教会、生活物資配給所などを備えた町づくりを計画するが、病のため志半ばで帰国し、明治44年（1911）自宅で亡くなった。その数ヵ月後、名古屋高等工業学校建築科を卒業した昌平は、生前の父が話していたコンドルの下で働くチャンスを振り切って、南満洲鉄道建築課に就職する。父への思いが強すぎたのかもしれない。このことを昌平は後日「一生の不覚に思えた」と語っている。

武一郎の教えはいかにも明治の技術者らしいものだった。なるべく早く実地で経験を積み、社会の役に立つ人間になること、海外で知見を広め、常に学ぶ姿勢でいること、そのために全力を尽くすこと。まず兄・昌平が父の教えに導かれ、兄を追うようにして軍平もまた、建築家への道を邁進するのである。

松田武一郎（1862〜1911）　岡崎藩出身。鉱山技師。1883年、東京大学理学部採鉱冶金学科卒業後、直ちに三菱に入社。やがて筑豊に存在する三菱所属の炭鉱すべてを統括するまでになった。1899年、工学博士。日本の炭鉱技術の第一人者として後藤新平に請われ、1908年、南満州鉄道撫順炭鉱の初代所長に就任。1910年、病を得て、開発計画半ばで帰国。翌年、自宅で亡くなった。1912年、朝倉文夫製作の胸像が撫順炭鉱事務所前に建立された

［＊1］平田重雄（1906〜87）
建築家。1931年、コーネル大学建築科卒業後、松田建築事務所に入所。1942年、松田平田設計事務所に改称。主な作品に、平田重雄邸（1936）、平田家箱根仙石原別邸（1936〜）がある
［＊2］松田昌平（1889〜1976）
建築家。松田軍平の実兄。1911年、名古屋高等工業学校建築科卒業。南満州鉄道建築課、日本ゴム嘱託、福岡市嘱託を経て、1931年、松田建築事務所を開設。福岡を拠点に活躍した
［＊3］フライベルク鉱山学校（Bergakademie Freiberg）
ドイツ・ザクセンに1765年、設立された鉱山学校。優秀な鉱山技師を数多く輩出し、当時鉱山界で影響力が最も大きかった

■■■

アメリカで得たもの

父の死から7年後、軍平は兄と同じ名古屋高等工業学校建築科を卒業し、2年足らず働いた後、海外に旅立つ。大正10年（1921）6月、ニューヨークに到着すると、曾禰達蔵の紹介状を持って現地の建築家・妻沼岩彦［＊6］を訪ね、妻沼からコーネル大学建築科［＊7］に在学中の横河時介［＊8］を紹介されると、今度は横河から建築科長のボスワース［＊9］に紹介され、早速9月から第3学年への編入が認められる。当時のコーネル大学建築科は、横河時介曰（いわ）く「日本でいえば高等工業学校みたいなもの」だったというから、軍平の望むところである。言語のハンディキャップをものともせず、わずか2年で卒業し、クリフトン・ベックウィズ・ブラウン牌［＊10］を受賞している。卒業後、さらに知見を広めるべく、建築史の教授が引率するヨーロッパ建築見学ツアーに参加し、旅程終盤の滞在先のエディンバラで関東大震災の報を知り、直ちに帰国するつもりでニューヨークに戻ると、父親代わりの兄・昌平から「暫く貴地で働いてみたら」との手紙を受け取り、そのままニューヨークの設計事務所で実務を積んだ。

そしてアメリカでの総仕上げは、トローブリッジ＆リヴィングストン建築事務所（以下、T&L）［＊11］での「三井本館」（1929）の仕事である。2年間ニューヨークで基本設計に従事し、6年ぶりに帰国すると、竣工までの2年間、三井本館の工事現場で働いた。このことが建築家としての自信となり、昭和6年（1931）9月の松田建築事務所（現・松田平田設計）開設に至るのである。

軍平がアメリカで得たものは計り知れない。建築家としての成長、自信、そして誇り。人との縁も、その後の建築活動に大きな影響を与えた。まず、初期の建築主にはアメリカ時代の知人が多い。“時さん”（横河時介）との関係は生涯続く。コーネル大学では同じ製図室で学び、一緒にゴルフを楽しんだ。軍平が三井本館の現場で働いていた頃、時介が横河工務所で図面を引いていた「交詢社ビル」（1929）が竣工すると、いつかは自分もこんな建築をと羨ましく思い、昭和8年（1933）、交詢社ビルに入居する。そこにはコーネル大学からの友人の造園家・戸野琢磨［＊12］もいた。横河と松田の両事務所に注目すると、「三井高修伊豆別邸」（1934）の工事監理をした菰田喜三郎（1932入所）は横河工務所からの転任で、不景気の最中にコーネル大学を卒業して帰国した藤井羊三（1928卒）と平田重雄（1931卒）は松田建築事務所に、依田高義（1929卒）は横河工務所に入所し、両事務所はコーネル大学の後輩たちの受け皿になっている。建築主に注目すると、共に三井系（鐘紡を含む）の仕事を多く手掛けている。戦後の「日比谷三井ビル」（1960）に至っては、横河工務所と松田平田設計事務所の共同設計である。そして軍平とともに事務所を牽引する平田重雄との出会いも、コーネル大学を介して得られた縁である。

■■■

利害を超越したパトロン

一方、兄・昌平は九州で建築活動を続けていた。軍平と同じ昭和6年9月に松田建築事務所を開設し、軍平の松田建築事務所が九州や満洲で仕事をする時には、何かと協力している。また昌平は、以前より石橋徳次郎・正二郎兄弟［＊13］の建築顧問をしており、それによって軍平は石橋家という強力なパトロンを得る。軍平は、建築家には「利害を超越したパトロン的後援者」が必要で、それなしには「芽ばえもしないし、永続も発展もしない」、「そのパトロンが社会的に信頼される有力者であればあるほど、発展する」と後年語っているが、それはまさに石橋家のことである。その親密の度合いを示す興味深い事実がある。昭和12年（1937）春、松田建築事務所は交詢社ビルから「高千穂ビル」（1936）［＊14］の2階に移転するが、それに前後してブリッヂストンタイヤ（現・ブリヂストン）の東京支店（後に東京本社）も、高千穂ビルの1階と3階に入居するのである。建築家とパトロンの同居は、「ブリッヂストンタイヤ本社」（1941）の完成まで続く。

■■■

ツーマン・コントロール

そして軍平が恵まれたのはパトロンだけではなかった。パートナーにも恵まれた。

建築評論家・浜口隆一は松田軍平と平田重雄について、「実際上にも、ならびたつ主宰

三井本館（1929）　松田軍平の建築家としての出発点となった作品。米国で2年間設計に携わり、帰国後2年間現場監理副主任として働いた。「私としては出来るだけアメリカのいい所を生かしたつもりでした。当時の最高級の大建築を、設計のスタートから完成までのやり方を直接身を持って体験できたということは、本当の幸運だったと思います」と軍平は語っている。1998年、国の重要文化財に指定された

［＊4］曾禰達蔵（1852〜1937）
（『INAX REPORT』No.167、p.4〜参照）
［＊5］渡辺 渡（1857〜1919）
鉱山技師。建築家・渡辺仁の父。1879年、東京大学理学部採鉱学科卒業後、同助教授。1882年から3年間、フライベルク鉱山学校に留学。1886年、工科大学発足と同時に同教授。1902〜18年まで同学長

［＊6］妻沼岩彦（Thomas S. Rockrise　1878〜1936）
建築家。1912年、シラキュース大学建築科卒業後、ニューヨークに上京。T&L、バレル・ホフマン建築事務所などを経て、1918年、独立した。長男・George T. Rockriseも建築家で、松田兄弟と親交があった
［＊7］コーネル大学（Cornell University）
米国ニューヨーク州イサカ（Ithaca）に1865年、創立された私立大学。同建築科（College of Architecture）は1871年の設立で、国内3番目の古さ。早い時期に小島憲之（1875卒）、妻木頼黄（1884卒）らが留学している
［＊8］横河時介（1896〜1974）
建築家・実業家。横河民輔長男。1922年、コーネル大学建築科卒業後、横河工務所に入所。主な作品に安田岩次郎邸（1934）がある
［＊9］ボスワース（Francke Huntington Bosworth Jr. 1875〜1949）
建築家。1897年、イエール大学建築科卒業。コーネル大学建築科教授。1919〜28年、同建築科長。著書に『Study of Architectural Schools』（1932）がある。平田重雄は恩師として、ボスワースをただ一人挙げている
［＊10］クリフトン・ベックウィズ・ブラウン牌（Clifton Beckwith Brown Memorial Medal）
コーネル大学建築科で設計の成績が最も優秀な卒業生に贈られる賞。平田重雄も卒業時に同銀牌を受賞している
［＊11］トローブリッジ＆リヴィングストン建築事務所（Trowbridge & Livingston）
ニューヨーク出身の建築家・トローブリッジ（Samuel Beck Parkman Trowbridge　1862〜1925）とリヴィングストン（Goodhue Livingston　1867〜1951）による建築事務所。ニューヨーク市を拠点に活躍した。日本での作品に、三井本館（1929）、三井銀行横浜支店（1931）、同名古屋上前津支店（1931）、同大阪川口支店（1931）、同船場支店（1931）がある
［＊12］戸野琢磨（1891〜1985）
造園家。1918年、札幌農学校卒業後、渡米。コーネル大学大学院でランドスケープ・アーキテクチャーを学ぶ。コーネル大学では日本庭園の講義も担当した。帰国後の1925年、日本初の造園設計事務所を開設する。主な作品に、石橋徳次郎邸庭園（1933）、著書に『趣味のパテオ』（共著、洪洋社　1930）がある。1931年、帰国した平田重雄に、軍平の事務所開設の情報を教えたのは戸野である
［＊13］石橋徳次郎（2代目、1886〜1958）と正二郎（1889〜1976）兄弟
実業家。1918年、日本足袋（後の日本ゴム）設立。1931年、ブリッヂストンタイヤ設立。1966年までに松田平田設計事務所では、ブリヂストン関係の仕事を58件（本社ビル4件、支店3件、工場20件、住宅17件を含む）手掛けている
［＊14］高千穂ビルディング（1936）岡田捷五郎
戦後米軍に接収されるが、接収解除とともに復帰。1960年に「松田平田設計事務所ビル」が完成するまでここを拠点とした。設計者の岡田捷五郎（1894〜1976）は軍平が1915年、東京美術学校を受験した時の受験仲間で、一緒に上野動物園に行き、肝心の試験に遅刻したという逸話がある

潮田勢吉邸（1935） スパニッシュ様式の邸宅。傍軒の出ない切妻、外壁と同じ仕上げの屋根付きの煙突、コテ跡をわざと残した塗り壁、外壁から突き出して並ぶ梁の頭、入り口上部のキャノピーを支えるスクロールした持送り、テラスから外階段で上がるバルコニー、これらはスパニッシュ様式の要素である。当時、日本のスパニッシュ様式の流行は既に下火で、シンプルな簡易版が普及していた。そんな日本のスパニッシュ建築史の流れとは全く関係なく、アメリカ直伝の姿で現れた。建築主の潮田勢吉は、軍平と同じ1923年にコーネル大学工学部を卒業しており、軍平とはその頃からの知り合いであろう

上――藤井舜次邸（1933） 急勾配の切妻屋根に、ハーフティンバーを部分的に用いたチューダー様式の邸宅。建築主と軍平の建築の好みが一致して、すんなりこの様式に決まったという。軍平のコーネル大学での最初の課題とよく似ている。建築主の藤井舜次は、後に松田建築事務所所員となる藤井羊三の兄である。羊三は1928年、コーネル大学建築科卒業後、T&Lを経て、1935年、松田建築事務所に入所した軍平の後輩。軍平がニューヨークのT&Lで働き、羊三がコーネル大生だった頃、舜次も米国東部の大学に留学しており、軍平とはその頃からの知り合いであろう
下――田島繁二邸（1936） スパニッシュ様式の邸宅。緩やかな勾配の屋根、少ない軒の出、傍軒の出ない切妻、外壁と同じ仕上げの屋根付きの煙突など、建物の造形はスパニッシュだが、スパニッシュの装飾的な要素は控えめで、都会的な印象を受ける。建築主の田島繁二は当時、三井物産代表取締役。かつて同ニューヨーク支店長を務め、軍平をT&Lに紹介した人物である。建物は現在、南アフリカ共和国大使公邸として使われている

者であり、まさにツーマン・コントロール」、「主宰者が建築家としての人間像を、もちつづけているのが、この事務所の特徴である」と述べている。

所員の証言から事務所における2人の役割を探ると、最初は軍平のワンマンで、「業務にデザインにドラフトにと活躍」していた。事務所第1号作品の三井高修伊豆別邸は、軍平によって既に基本設計が出来ており、第2号作品の「石橋徳次郎邸」（1933）も、プランと様式が決まっていた。一方の平田は、RC造の屋根スラブにスパニッシュの傾斜屋根を載せることに抵抗を感じたり、ハーフティンバーが本来の構造材ではなく化粧材でしかないことに矛盾を感じながら、軍平の指示通りに仕事をこなしている。

松田と平田――2人の建築家には、年齢差もあるが（ひと回り違う午年生まれ）、それ以上の世代のギャップを感じさせられる。共にコーネル大学建築科を優秀な成績で卒業しながら、軍平（1923卒）が学んだのは様式主義全盛のアメリカで、その後は、軍平曰く「1929年から30年になってがらっと変わりだし」、平田（1931卒）は、「大学の上級生の頃、独逸に於けるグロピウス教授を中心に出来たバウハウスの影響が保守的なアメリカの建築界に芽ばえ始めた」という。アメリカで様式主義を修得した松田軍平と、モダニズムに傾倒した平田重雄［＊15］。日本の建築界でも昭和10年（1935）頃に前者から後者に主流が移行したことを考えると、事務所における平田の比重が、とりわけデザイン面で増大したであろうことは容易に想像できる。実際に小坂秀雄（1935～37在籍）［＊16］は、当時を振り返って、主に平田がデザインを受け持ち、軍平は「建築で一番大切なのはプランだよ」と言いながら、所員の製図台のところに来てはプランを一生懸命考えていたと述べている。後に版画家として名を成す駒井哲郎（1943～45在籍）も、平田から建築の設計について親しく薫陶を受けたという［＊17］。

昭和17年（1942）、松田建築事務所は松田平田設計事務所に改称する。名実ともにツーマンである。まるでタイプの違う（されどウマの合う）建築家をパートナーにしたことが、事務所に発展をもたらしたことは間違いない。そして“建築家としての人間像”を持ち続けた軍平は、デザイン、プラン、ディテールはもちろん、設備、材料、構造にも深い関心を寄せ、建築主のためだけではなく、日本の建築、ひいては社会全体のために、新しい優れた技術の開発と採用に努めた。例えば「ブリヂストンビル第2期工事」（1959）で、建築構造として日本で初めてハイテンションボールトが使用されたのも、「中山競馬場観覧スタンド改築1次工事」（1956）以降の各地の競馬場観覧スタンドで、柱のない大スパンの大屋根が実現したのも、軍平の指示に基づく研究の成果だという。

■■■

建築家は商人ではない

建築活動を通して社会に貢献することは、軍平の考える建築家の職責だった。

軍平は事務所開設の翌月に日本建築士会［＊18］に入会している。日本建築士会は現在の日本建築家協会（JIA）のルーツに当たるが、当時は新規入会者が年に10名ほどの、ごく一部の建築家による組織だった。会員には海外経験者が比較的多く、軍平の場合も、アメリカでの経験が明らかに影響している。「建築家（アーキテクト）という職業の真の価値の欧米のように認められていないのは何故だろう」が彼の最大の課題であり、「建築家と請負業者は違う」が後々まで彼の口癖だった。昭和23年（1948）には日本建築士会会長に、昭和31年（1956）に（旧）日本建築家協会［＊19］が設立されると初代会長に、昭和50年（1975）に日本建築設計監理協会連合会［＊20］が設立された時にも初代会長に選ばれている。晩年まで、建築家の地位の向上のために力を注ぎ、建築家に誇りと自覚を促し、建築家の信条と職責を説いた。彼が建築家の信条として最初に挙げたのは、「建築家の人格、才能、正義感並びに行動は社会の尊敬に価するものでなければならない」である。彼が古武士と呼ばれた所以であろう。

最後に彼の「建築家十訓」の第一項を引用して、建築家・松田軍平の紹介を終えたい。

建築家よ誇りを持って下さい。
建築家は商人ではない。商人は金の為に働き、
建築家は仕事のために生きる。

✽（図版解説も筆者）

［＊15］平田重雄は後年、尊敬する建築家に村野藤吾、前川國男、丹下健三の3氏を挙げている
［＊16］小坂秀雄（1912～2000）
建築家。1935年、東京帝国大学建築学科卒業後、松田建築事務所を経て、1937年、逓信省営繕課に入省。1963年、丸の内建築事務所設立。代表作に外務省本庁舎（1960）がある
［＊17］『束の間の幻影：銅版画家駒井哲郎の生涯』中村稔著（新潮社 1991）
［＊18］日本建築士会（1914～51）
建築家の職能団体。設立時の名称は全国建築士会といった。1951年に解散し、日本建築設計監理協会に引き継がれた
［＊19］（旧）日本建築家協会（1956～87）
建築家の職能団体。前身は日本建築設計監理協会。1987年、新日本建築家協会（現・日本建築家協会）に引き継がれた
［＊20］日本建築設計監理協会連合会（1975～87）
建築設計事務所の職能団体。1987年、新日本建築家協会（現・日本建築家協会）に引き継がれた

上――外観 白い塗り壁、軒の出が少ない緩やかな傾斜の屋根、スパニッシュ瓦、外壁と同じ仕上げの煙突、アーチ形の開口、テラスに面したロッジア、外階段から上がることのできる屋根付きの木製バルコニーなど、スパニッシュとして実に密度が高い
下――1／50の模型 1933年11月、第7回建築展覧会（日本建築学会主催）で「海辺の別荘」として出品されたもの。その後、永らく事務所にあったという

■■■

旧・三井高修伊豆別邸

［建築概要］
所在地：静岡県下田市
規模：地下1階、地上2階
構造：RC造
竣工年：1934年

竣工こそ遅れたが、松田建築事務所の第1号作品である。軍平が独立する半年前に設計を依頼されていた。三井高修からの依頼は実はこれが2度目で、前回の「三井高修邸内アトリエ案」（1925、実現せず）もやはりスパニッシュだった。それから9年を経て、やっと三井高修のためのスパニッシュ建築が実現したことになる。伊豆・須崎半島の人家から離れた場所に、山を背に、入り江を前にして建つ。1971年に周辺一帯が須崎御用邸となった（写真3点とも：松田平田設計所蔵）

階段室 建物中央を占めるホールに面した円形の間に、螺旋階段が優美な姿を見せる。軍平がニューヨークで一時働いた、ジョン・ラッセル・ポープ建築事務所の邸宅作品を彷彿とさせる

南面外観　明るい色の外壁に、スパニッシュ瓦葺きの、緩やかな勾配の屋根が載る。典型的なスパニッシュの外観である。竣工時の外壁は、淡いクリーム色だった。屋根瓦が青緑色なのは、日本のスパニッシュ作品にたまに見られることである。かつては造園家・戸野琢磨によって、スイミング・プール、壁泉、パーゴラ、四阿（あずまや）などからなるスパニッシュの庭園が設けられていたが、今はない

1階居間　竣工時には配膳室、食堂、居間が並んでいたが、1957年の改築で間仕切りが取り払われ、1室となった。装飾をなるべく残し、変更した部分にも改築前の意匠を採用したことで、当初の雰囲気をよく保っている

石橋徳次郎邸（現・石橋迎賓館）

［建築概要］
所在地：福岡県久留米市
規模：地下1階、地上2階、塔屋付
構造：RC造
竣工年：1933年

松田建築事務所の第2号作品。設計に先立ち、石橋徳次郎は軍平の案内で「東京中の目ぼしい邸宅を片端から熱心に見て歩き、スパニッシュの様式が断然気に入って」、設計を依頼したという。施工は、当時スパニッシュの邸宅を数多く手掛けていた、軍平にとっては古巣の清水組（現・清水建設）。「理想の家を作るには建築主と設計者と施工者の完全なテームウォークが何より大切な事と思はれます」と軍平は記している。現在はブリヂストンの迎賓館として使われている

サンルーム　書斎とテラスの間に設けられた明るい空間。床はタイル張り、壁と天井は白色プラスター塗りで、天井は柔らかな曲線を描く。テラスに面した開口は大きな放物線アーチ形で、アメリカのスパニッシュ・コロニアル・リヴァイヴァル様式の作品には見られる要素だが、日本のスパニッシュでは大変珍しい

左上――装飾的な木製格子の嵌まったロッジアの開口部
右上――チェーンで吊り下げられたスパニッシュの照明
左下――テラスの噴水　タイル張りの八角形の噴水池から、水が一筋噴き上がる、典型的なスパニッシュの噴水
右下――装飾的な通気孔　たくさんの小さな穴が縦横に並んだ装飾的な通気孔は、スパニッシュ独特の要素である

上――正面外観　妻壁には、スペインの守護聖人・サンチャゴの象徴であるホタテ貝の装飾が付いている
下――1階和室　メインの2階建てに雁行して接続する平屋部分にある。続き間と縁側からなる開放的な空間で、ガラス戸の外にモミジ、沓脱ぎ石、飛石、苔、竹林、石灯籠などが見える

階段ホール　白色プラスター塗りの壁に、褐色の木部がアクセントになっている

東側から見る　テラスは鉄平石敷きで、ロッジアのアーチを支える円柱とバラストレードは龍黄石製である。手前の大きなアーチ形開口の内側はサンルームで、外側には日よけが付いていた。その上部の装飾的な持送りに支えられた部分は、スパニッシュの木製バルコニー風につくってあるが、実は内側は和室と広縁である

2階オフィス空間　建物の外周をぐるりと窓が並んでいることと、当時の事務所建築にしては階高が高く、壁から天井まで白く塗られているため、内部のオフィス空間は均一に明るい

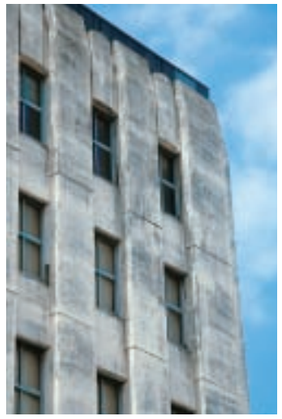
旧・三井物産門司支店

［建築概要］
所在地：福岡県北九州市門司区
西海岸1-6-2
規模：地下1階、地上6階
構造：SRC造
竣工年：1937年

松田建築事務所初の高層建築。この作品以降、松田建築事務所は三井物産の建物を次々と任されるようになる。ちなみに、田島繁二が当時の三井物産代表取締役で、三井高修が同取締役だった。門司港と門司港駅の目の前という好立地にある。1953年に国鉄に売却され、門司鉄道管理局となり、国鉄が民営化されると、JR九州本社ビルとして利用された。現在は北九州市が管理している

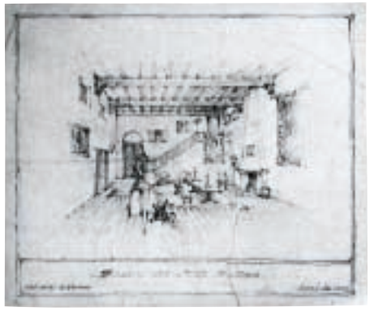
上――正面入り口　黒花崗石張りの洒落た構え
下――入り口上部のレリーフ　彫刻家・安喰たかのぶの作品。安喰は平田重雄のコーネル大学時代の友人で、1930年2月にアメリカン・アカデミー・イン・ローマ同窓会主催の全米学生設計競技で、平田が1等を受賞した時にも協働している。安喰の詳しい経歴は不明だが、コーネル大学の同窓会誌によると、大阪出身で、大戦中に亡くなったという

左――正面外観　竣工時はタイル張りで、上下の窓の間と窓台は黒花崗石張りだったが、今は淡いピンク色のモルタルが吹き付けられている
右――建物頂部　先に竣工した三井物産名古屋支店（1935、設計：山下寿郎）の建築様式に不満を持った三井物産側から、より合理的な建物を注文されたが、機能主義的な表現までは許されず、このような彫塑的な造形に落ち着いたという。なお、山下寿郎のためにひと言付け加えておくと、同名古屋支店は三井の建物の伝統にのっとった堂々たる古典主義建築で、責められるような作品ではない



松田軍平 ドローイング

1


2

3

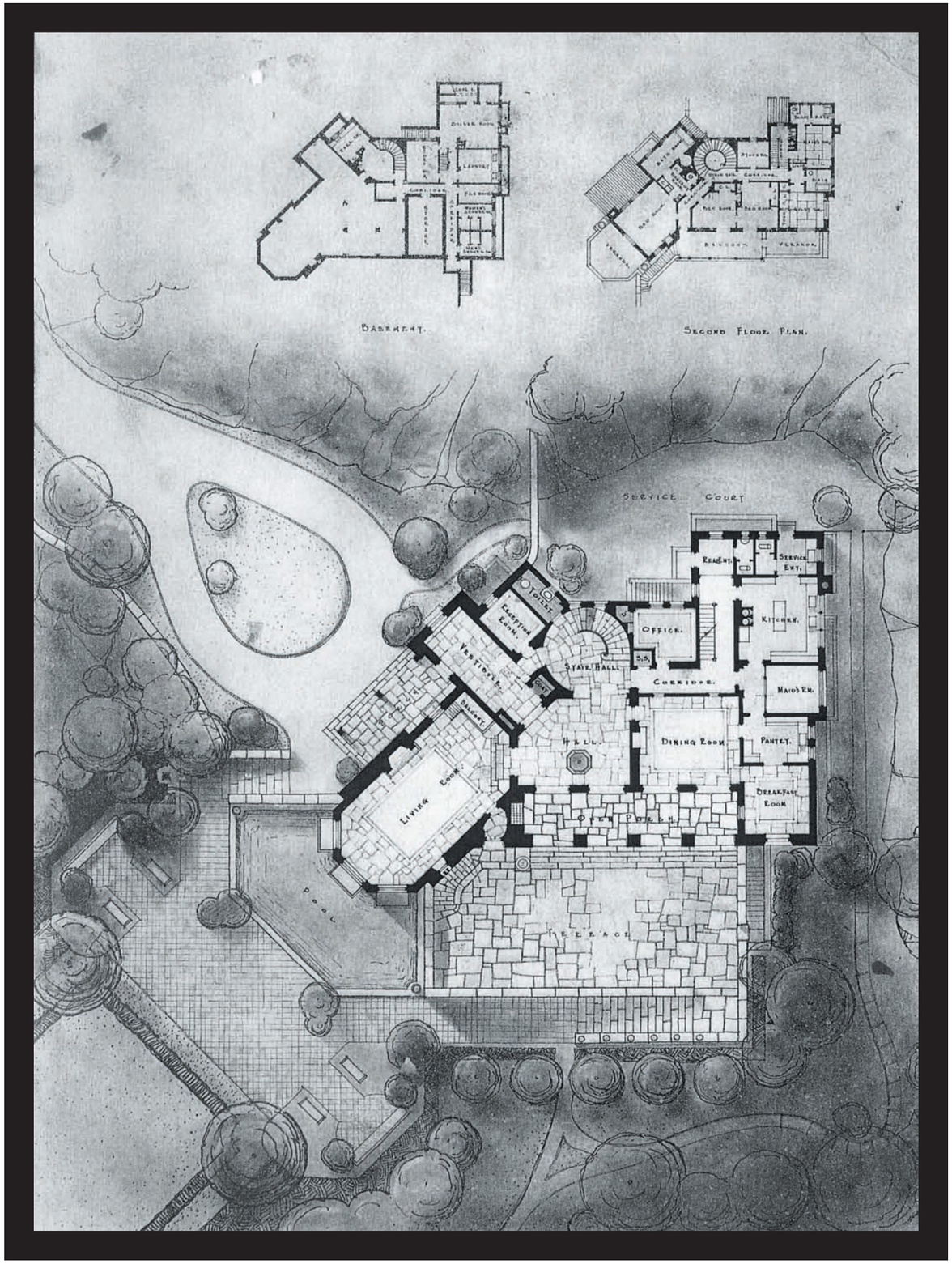
4

5

6

7

1　石橋徳次郎邸パース(1933)　左下に「S. Hirata Oct. '33」、右下に「Gumpei Matsuda, architect」のサインが見える
2　三井高修邸内アトリエ案(1925)　明るい色の壁、スクロールした持送りを持つ化粧梁、装飾的な階段手すり、上部が台形に張り出した暖炉など、明らかにスパニッシュ様式である
3　コーネル大学建築科の最初の住宅の課題(1921)
4,5　旅先でのスケッチ(1923)　ヨーロッパ建築見学ツアー中に描かれた。4はフィレンツェ、5はアッシジの風景
6　アメリカでのスケッチ(1921)
7　松田軍平・愛子の墓(1973)　亡くなった妻・愛子のために軍平が設計した。黒い自然石に「真・愛・美」と刻字されている。「自分等の永久に住む墓のデザインをすることも人生の悟りかもしれません」と軍平は書いている



三井高修伊豆別邸のプラン　配置図を兼ねた1階平面図と、地下平面図、2階平面図が1枚にレイアウトされ、着色されていることから、展覧会用(おそらく1933年11月に開催された第7回建築展覧会のため)に作成されたものだろう

松田軍平 人と作品

1894-1981

家族写真 左から軍平、姉・直枝、父・武一郎、母・寿恵、兄・昌平

略歴

1894年（明27）	10月8日、松田武一郎の次男として福岡県に生まれる
1908年（明41）	1月、父・武一郎、南満州鉄道撫順炭鉱の所長に就任
1911年（明44）	2月、父・武一郎病死。7月、兄・昌平、名古屋高等工業学校建築科卒業。8月、南満州鉄道建築課に就職（1913年、病のため帰国）
1914年（大3）	3月、福岡県立福岡工業学校卒業
1918年（大7）	3月、名古屋高等工業学校建築科卒業。4月、清水組に入社。12月、軍隊に入隊（～1920年春）
1921年（大10）	3月、清水組を退社、渡米。6月、ニューヨークに到着。9月、コーネル大学建築科3学年に編入
1923年（大12）	6月、同大学卒業。ヨーロッパ建築見学ツアーに参加。10月、ジョン・ラッセル・ポープ建築事務所で設計に従事☆
1924年（大13）	4月、トローブリッジ＆リヴィングストン建築事務所に入所☆
1925年（大14）	4月、T&Lで三井本館の設計に従事
1927年（昭2）	4月、帰国。三井本館工事監理副主任（～1929年6月）。12月、上野山愛子と結婚
1929年（昭4）	T&L設計の三井銀行4支店の工事監理（～1931年8月）
1931年（昭6）	9月、赤坂丹後町の自宅の2階に松田建築事務所を開設。所員は軍平、浅田繁男、立花祐次郎、平田重雄の4名。10月、日本建築士会に入会
1932年（昭7）	坂本俊男入所
1933年（昭8）	銀座の交詢社ビルに事務所を移転（所員7名）
1934年（昭9）	平田重雄、愛子の妹と結婚
1935年（昭10）	兄・昌平の事務所と合同で奉天事務所開設（～1945年）
1937年（昭12）	内幸町の高千穂ビルに事務所を移転（所員約30名）
1942年（昭17）	9月、松田平田設計事務所に改称
1948年（昭23）	4月、日本建築士会会長（～1949年）
1956年（昭31）	6月、日本建築家協会初代会長（～1959年、1968年再任）
1966年（昭41）	8月、松田平田坂本設計事務所に改称
1970年（昭45）	6月、東京都設計事務所建築保険組合理事長（～1978年）
1973年（昭48）	4月、妻・愛子逝去
1975年（昭50）	11月、日本建築設計監理協会連合会初代会長（～1980年）
1976年（昭51）	8月、兄・昌平逝去
1981年（昭56）	4月23日、逝去（86歳）

☆『松田軍平［回顧録］』では、T&L入所を1925年4月としているが、既に石田繁之介、鈴木博之両氏が指摘しているように、三井側の資料と矛盾する。鈴木博之氏の推測しているように、T&L入所は正しくは1924年4月、J.R.ポープ事務所の入所時期も同書の記述より1年早い1923年10月が正しいと考えられる

主な作品

※印は竣工月不明

1933年（昭8）	石橋徳次郎邸（1月、福岡）、藤井舜次邸（※東京）、ブリヂストンタイヤ久留米工場（12月、福岡）
1934年（昭9）	三井高修伊豆別邸（4月、静岡）、牧野良三邸（※東京）、加納百里箱根仙石原別邸（10月、神奈川）、昭和生命館（※福岡）
1935年（昭10）	都新聞社増築（2月、東京）、東條写真館（※東京）、潮田勢吉邸（8月、東京）、鐘紡銀座サービスステーション（11月、東京）
1936年（昭11）	田島繁二邸（10月、東京）
1937年（昭12）	石橋正二郎邸（4月、東京）、繁柱寺（※栃木）、三井物産門司支店（6月、福岡）、三井高長那須別邸（6月、栃木）、旭屋デパート（7月、福岡）、暁星中学講堂武道場（9月、東京）、三井銀行新宿支店（12月、東京）、高岡組本店（※満洲）、三井物産奉天支店（※満洲）
1938年（昭13）	新順一邸（※東京）、三和鉱業旭鉱山部事務所（※東京）
1939年（昭14）	日本女子大学西生田学寮（5月、神奈川）、商船三井あるぜんちな丸一等喫煙室（5月）、三井鉱山目黒研究所（7月、東京）、中部謙吉邸（※東京）、宮川武邸（※東京）、大阪商船ぶら志る丸一等食堂（12月）、三井鉱山石油合成工場一連の工事（※福岡）
1940年（昭15）	新田丸一等喫煙室・一等読書室（3月）、石橋正二郎軽井沢山荘（8月、長野）
1941年（昭16）	大洋捕鯨株式会社本社（※東京）、ブリッヂストンタイヤ本社（12月、東京）、近江屋ホテル（※満州）
1942年（昭17）	日本女子大学西生田校舎（※神奈川）、中部化学研究所（5月、東京）、三井物産新京支店（※満洲）、満洲合成燃料病院（※満洲）
1943年（昭18）	三井化学三池染料工業所一連の工事（※福岡）
1944年（昭19）	三井物産済南支店（※中国）、三井化学病院研究所（※福岡）
1945年（昭20）	米軍三宅坂施設（※東京）、日本タイヤ仮本社（10月、東京）
1946年（昭21）	米国空軍横田地区諸施設（※東京）（～1949年）
1947年（昭22）	米軍横浜本牧地区家族用住宅附属建物施設（※神奈川）
1951年（昭26）	ブリヂストンビル第1期工事（12月、東京）
1952年（昭27）	沖縄米国陸軍施設（※沖縄）（～1954年）
1953年（昭28）	琉球政庁舎（4月、沖縄）
1956年（昭31）	中山競馬場観覧スタンド改築1次工事（10月、千葉）
1957年（昭32）	東京競馬場「万歳館」改築（11月、東京）
1959年（昭34）	ブリヂストンビル第2期工事（5月、東京）
1960年（昭35）	松田平田設計事務所ビル（6月、東京）、日比谷三井ビル（8月、東京）、中山競馬場観覧スタンド改築2次工事（9月、千葉）
1973年（昭48）	松田家の墓（※神奈川）

＊松田建築事務所時代の作品を中心に取り上げた

取材協力・資料・写真提供
北九州市産業経済局門司港レトロ室／木村和枝／ブリヂストン久留米工場／松田順吉／松田平田設計情報管理室技術情報センター／『河の流れは』（松田昌平　1976）／『くさび』77号（1966.7）／『現代建築をつくる人々』浜口隆一・村松貞次郎著（世界書院　1963）／『建築夜話』（日刊建設通信社　1962）／『新築記念 石橋徳次郎邸』（1933）／『松田軍平［回顧録］』（松田平田坂本設計事務所　1987）／『真雪かずらの咲く蔭に』（故松田昌平先生追悼委員会　1977）／『三井の建築家』石田繁之介著（三友新聞社　1992）／鈴木博之「邸宅建築からの出発」『草創と継承』（松田平田設計　2001）　（50音順）

＊特に明記のない写真は、2008年5～7月に新規撮影したものです。

［次号予告］
次号（2009年1月20日発行）の「生き続ける建築」は蔵田周忠です。